

大学生における援助要請の傾向を測定する尺度の作成

Development of a scale for university students to measure of help-seeking tendency

大篠 明莉

Akari Oshino

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：援助要請，尺度作成，大学生

Key words : Help-seeking, Development of a scale, University students

1. 問題と目的

個人が問題を抱え、それを自身の力では解決できない場合に、必要に応じて他者に援助を求めることは重要な対処方略の一つであり、このような現象は援助要請と呼ばれる(永井,2013)。援助要請の研究は社会心理学やカウンセリング心理学など様々な心理学領域で研究されてきたが、中でも臨床心理学領域では、主に悩みや精神的な問題を抱えた際に身近な他者や専門家へ相談する行動などが扱われてきた(永井,2020)。臨床心理学において援助要請が注目される背景として永井(2020)は、一人で対応しきれないような困難を抱えても誰にも相談しない現象が一般的に見られることを挙げており、また、そういった者の存在は永井・新井(2005)・茨木・松井(2014)などから明らかであるが、永井・新井(2005)は、悩みを相談しない者の中には「そもそも相談意図のない者」と「相談したくてもしない者」が存在すると指摘している。

ところで、これまで個人の援助要請の傾向を測定する尺度として主に永井(2013)の援助要請スタイル尺度が用いられてきた。この尺度では、個人の援助要請を「援助要請自立型」、「援助要請過剰型」、「援助要請回避型」の3つに分類しており、困難を抱えても誰にも相談しない者は援助要請回避型に該当すると考えられるが、その中には「そもそも相談意図のない者」と「相談したくてもしない者」の両者が混在していると推測される。しかし、茨木・松井(2014)は「相談したくてもできない」場合と「必要がなく相談しない」場合を区別した上で、より積極的な介入が必要と思われる「相談したくてもできない」場合の適切な支援について明らかにする必要があると述べていることから、

両者を援助要請回避型として一括りにすることは望ましくないと考えられる。

そこで本研究では、「そもそも相談意図のない者」と「相談したくてもしない者」の区別された援助要請の傾向を測定する尺度を作成することを目的として、大学生を対象に、尺度項目を選定するためのアンケート調査(研究1)と作成した尺度の信頼性と妥当性を検討するための質問紙調査を実施した。

2. 研究1(尺度の項目作成のための調査)

方法：「そもそも相談意図のない者」と「相談したくてもしない者」とを分類するための質問項目を選定することを目的として、首都圏の女子大学に通う大学生を対象に、Google Formを用いた自己記入式のWebアンケートを実施した。アンケートには、悩みや不安を経験したときに誰かに相談したくてもできなかった経験、誰かに相談しようと思わなかった経験の有無や、その理由について回答するよう求める内容などが含まれていた。

結果：大学生102名を対象として調査を実施したところ、47名から回答を得た。得られた回答をKJ法に準じた方法を用いて分析し、「相談したくてもしない者」と「そもそも相談意図のない者」とを分類するための質問項目について検討した。その結果、14の尺度項目を考案し、永井(2013)の援助要請スタイル尺度の中で援助回避型を測定する4項目の代わりに組み入れた。したがって、永井(2013)による援助要請過剰型を測定する4項目、援助要請自立型を測定する4項目と合わせた計22項目の尺度を、暫定的な大学生の援助要請の傾向を測定する尺度とした。

3. 研究2 (尺度の信頼性・妥当性の検討)

方法: 研究1で作成した尺度の信頼性と妥当性を検証することを目的として、大学生を対象とした質問紙調査を行った。構成概念妥当性を検討するにあたっては、新しい心理的ストレス反応尺度(鈴木他, 1997), 相談行動の利益・コスト尺度改訂版(永井・新井, 2008), K6 日本語版(Furukawa *et al.*, 2008), ここ1か月の援助要請の経験に関する質問を用いた。

結果: 調査対象者は首都圏にある4つの大学に通う大学生212名であり, 131名から回答を得た, 対象者の平均年齢は19.48歳 ($SD = 1.32$) であり, 性別は, 男性70名 (53.44%), 女性59名 (45.04%), その他2名 (1.53%) であった。

作成した尺度について因子分析を行った結果4因子が抽出され(表1), 大学生の援助要請の傾向は, 援助要請逡巡型(相談したい思いはあるが色々な障壁があるので相談しない傾向であり, 「相談したくてもしない者」に相当する)・援助要請無用型(援助要請を行うつもりがない傾向であり, 「そもそも相談意図のない者」に相当する)・援助要請過剰型・援助要請自立型の4つに分類されることが示唆された。

表1 作成した援助要請の傾向を測定する尺度の因子分析結果(最尤法・プロマックス回転, $N=115$)

項目	項目内容	I	II	III	IV
第I因子: 援助要請逡巡型 ($\alpha = .931$)					
q3×12	どんな悩みでも、悩んでいること自体を言いたくないため、相談しない	.919	-.128	-.082	-.028
q3×11	相談したいと思っても、相談することが恥ずかしいので、相談しない	.904	.019	.063	-.118
q3×16	相談したいと思っても、自分の印象が悪くなると思うため、相談しない	.863	-.102	.009	.008
q3×10	どんな悩みでも、自分が悩んでいると知られたいくないため、相談しない	.780	.060	-.102	.004
q3×20	相談したいと思っても、否定的な答えが返ってくると思うため、相談しない	.727	.089	.202	-.125
q3×14	相談したいと思っても、悩んでいることの内容を知られたいくないので、相談しない	.678	.116	-.091	-.158
q3×19	相談したいと思っても、なんとかならばいいから相談しない	.647	.074	-.021	.052
q3×9	これまで、どんな悩みでも自分一人で解決してきたため、相談しない	.611	.145	.055	-.060
q3×15	相談したいと思っても、相談する状況がさらに悪くなると思うため、相談しない	.578	-.087	-.009	.026
q3×18	どんな悩みでも、自分の考えを重視するため、相談しない	.575	.152	-.114	.047
q3×7	相談したいと思っても、相手に気を遣わせてしまうと思うため、相談しない	.441	.237	-.177	.217
第II因子: 援助要請無用型 ($\alpha = .878$)					
q3×3	どんな悩みでも、相談しても変わらないと思うため、相談しない	.069	.822	.084	-.057
q3×2	どんな悩みでも、自分一人で解決しなければと考えているため、相談しない	.053	.769	-.104	.099
q3×5	相談したいと思っても、理解してもらえないと思うため、相談しない	.242	.751	.071	-.084
第III因子: 援助要請過剰型 ($\alpha = .907$)					
q3×17	よく考えれば大したことないと思えるようなものでも、わりと相談する	.098	.020	.881	-.030
q3×21	比較的ささいな悩みでも、相談する	-.147	.134	.860	.024
q3×6	悩みを抱えたら、それがあまり深刻なものでなくても、相談する	.136	-.101	.846	-.004
q3×13	困ったことがあったら、ずっと相談する	-.106	.054	.835	.035
第IV因子: 援助要請自立型 ($\alpha = .766$)					
q3×4	相談より先に自分で試行錯誤し、いきづまったら相談する	.155	-.204	-.140	.752
q3×22	先に自分で、いろいろやってみてから相談する	-.257	.276	-.156	.746
q3×8	悩みが自分一人の方ではどうしようもなかった時は、相談する	-.003	.059	.306	.661
q3×1	少しづつでも、自分で悩みに向き合い、それでも無理だったら相談する	.123	-.245	.343	.675
因子間相関		I	.586	-.389	.210
		II	-	-.546	-.109
		III		-	.091

次に、上記4つの援助要請の傾向が、心理的ストレスや精神的健康度、また相談行動の利益とコストに対して与える影響を検討するため、重回帰分析を行ったところ、援助要請逡巡型は、心理的ストレス、自己評価の低下・秘密漏洩(相談行動のコスト)、自助努力による充実感(相談回避の利益)、精神的健康度に正の影響を与えており、援助要請無用型は、ポジティブな結果(相談行動の利益)に

負の影響を与えていた。援助要請過剰型は、ポジティブな結果に負の影響、問題の維持(相談回避のコスト)に正の影響を与えており、援助要請自立型は、ポジティブな結果、問題の維持、自助努力による充実感、精神的健康度に正の影響を与えていた。

4. まとめと今後の課題

本研究より、大学生の援助要請の傾向は、援助要請逡巡型・援助要請無用型・援助要請過剰型・援助要請自立型の4つの傾向に分類されることが示され、さらに、各援助要請の傾向は異なった特徴を有しており、相談したくてもしない者(逡巡型)と、そもそも相談意図のない者(無用型)を回避型として一括りにまとめるのではなく、区別することには意味があることが示唆された。また、本研究の結果からは、相談したくてもしない者(逡巡型)は相談行動のコストを懸念していることから、相談行動のコストが低減するよう働きかけることで、援助要請行動が喚起されるのではないかと考えられる、具体的には、秘密が守られながら援助要請が行える場を整えることや、そういった場の存在を周知することが、有用な支援となり得ると言えるだろう。

今後の課題としては、それぞれの援助要請の傾向をもたらず要因を検討することが挙げられる。

主要参考文献

Furukawa, T. A., Kawakami, N., Saitoh, M., Ono, Y., Nakane, Y., Nakamura, Y., H, Tachimori., N, Iwata., H, Uda., H, Nakane., M, Watanabe., Y, Naganuma., Y, Hata., M, Kobayashi., Y, Miyake., T, Takeshima & T, Kikkawa (2008). The performance of the Japanese version of the K6 and K10 in the World Mental Health Survey Japan. *International Journal of Methods in Psychiatric Research*, 17, 152-158.

茨木 詩織・松井 豊 (2014). 悩みを相談したくてもできない時に身近な人に求める接し方の検討 筑波大学心理学研究, (48), 19-28.

永井 智・新井 邦二郎 (2005). 中学生における悩みの相談に関する調査 筑波大学発達臨床心理学研究, 17, 29-37.

永井 智・新井 邦二郎 (2008). 相談行動の利益・コスト尺度改訂版の作成 筑波大学心理学研

究, 35, 49-55.

永井 智 (2013). 援助要請スタイル尺度の作成—
縦断調査による実際の援助要請行動との関連
から— 教育心理学研究, 61(1), 44-55.

永井 智 (2020). 臨床心理学領域の援助要請研究
における現状と課題——援助要請研究におけ
る3つの問いを中心に—— 心理学評論, 63
(4), 477-496.

鈴木 伸一・嶋田 洋徳・三浦 正江・片柳 弘司・右
馬埜 力也・坂野 雄二 (1997). 新しい心理的
ストレス反応尺度 (SRS-18) の開発と信頼性・
妥当性の検討 行動医学研究, 4 (1), 22-29

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所の
研究助成「回避型援助要請スタイルを持つ大学生
の学生相談機関利用に向けた介入方法の検討」(課
題番号: DB2204), 「大学生における援助要請の傾
向を測定する尺度の作成」(課題番号: DB2304) を
受けて実施したものです。

また、研究の実施に際しては、「大学生における
援助要請の傾向を測定する尺度の作成 (研究1)」
(受付番号: 05-011), 「大学生における援助要請の
傾向を測定する尺度の作成 (研究2)」(受付番号:
05-032) として、学内研究倫理審査委員会の承認を
受けています。